

人生相渉るとは…

高校・大学時代をのんびり過ごした私には、年月を経た分だけ多くの友人・知人がいる。

大阪大学大学院で文化人類学を教える池田 光穂氏(1956 年生)もその一人である。大阪出身で専門は医療人類学だが、根っからの懲り症で大学の理学部生物学科在学中に JICA 国際協力隊員として中米のホンジュラスでマラリア薬の配付支援活動に従事した経験を持つ。大学時代との研究とは別に、この時の経験から大阪大学医学部大学院前期課程に進学。その後、医学博士の博士号を得るが、経歴から医師免許を持っていない。熊本大学での教鞭を経て、大阪大学で人類学を講じる。ホンジュラスでの生活経験からスペイン語を得意とし、翻訳も多い。高校時代は陸上競技ハンマー投げの選手で、趣味は JAZZ 観賞。彼が監修した感染症に関する絵本：文:おおつか のりこ、絵:会田 洋介『感染症と人類の歴史』(全3巻)文研出版が、第24回学校図書館出版賞を今年、受賞した。

また、彼と同じ高校の同窓生で水産学にいた幸田 正典氏(1957 年生)は、昨年『魚にも自分がわかる ー動物認知症研究の最先端』ちくま新書を上程し、魚の認知機能という最先端の研究で注目される。アフリカのタンザニアでの魚類研究を経て、現在は大阪市立大学理学研究科(生物地球系専攻)で教鞭をとる。水産学部は、学問の性質上、他の学部と離れて海の近くに校舎があり、通学途中に私のところを訪れたりしていた。大学入学後にフルートを習い始めたり、一見物静かであったが芯の強い輩だった。

さらに、工学部建築学科で学んでいた東京育ち、鹿児島県出身の堅山 貴志氏(1954 年生)は、一昨年、仙台市宮城野区にある精神科病院の医院長を辞し、悠々自適の生活を送っている(らしい)。彼もまたユニークな経歴である。工学部建築学科に所属し、製図の課題に追われていた大学2年生の時、こんな作業は向いていないと、さっさと退学届を出し、医学部受験のために浪人生活に入った。2年間の努力と辛抱の生活を経て、東北大学医学部に見事に合格。当初の計画通り精

神科病院のスタッフに落ち着いた。やがて医院長となり、3.11 を迎える。沿岸部にあった病院も津波被害が想定されたが、高台にあったため難を逃れた。何事にも器用で、ギターを手にロックミュージックを奏でていた。

また、私と同じ文学部地理学仲間では、多々良 友博氏(1954 年生)という佐賀県の高校教員を経て、県立図書館勤務となり、佐賀大学で再び学び、大学教員を兼職した優秀な人物がいる。もともとは大学で考古学を学びたかったのだが、当時は大学に考古学の研究者がおらず、地理学専攻なら何でもできると私が転専攻に誘った。在学中から鹿児島県考古学会に所属し、発掘で得た資料をもとにいくつかの研究論文を発表している。研究熱心な彼にとって郷土資料館という職場は、最高の宝箱だった。倉庫に眠る鍋島家文書を解読し、資料のデジタル化など先進的な研究で注目されている。クラシックのピアノ曲が好きだった。

最後にもう一人、高校時代の同級生で田坂 祐治氏(1954 年生)という人物がいる。高校時代は、「地理」だけでなく他の教科の成績でも、常に私の上位に彼がいた。広島大学文学部地理学科に進学し、卒業後は山口県の公立高校の教員となる。高校時代は弓道部で、争いは好まず、マネジメント能力に優れていた。私が先生たちに恵まれ、早くから研究のまねごとに携わっていたが、彼の大学では大学院生という大きな壁があり、なかなか学部学生で研究をするチャンスに恵まれなかった。そこで教員の道を選んだ彼は、後に教育委員会へと転出した。60歳の定年直前に、県内随一と謳われる高校の校長に赴任する。県下 8 番目というわが母校出身者が一、二を争う高校の校長になるとは、「鳶が鷹を生んだ」ようだ、仲間に揶揄されたが、無難に職をこなし任期を終えた。これもまた人生なり。45 人いた同級生で校長経験者は 5 人。もちろん、予想外の私が最後だが…。

どう生きるか？人との出会いが一番である。本州の西の外れで生まれ、九州の田舎大学で学んだ後、関東の 2 つの大学・大学院院で学んだ私だが、こうした仲間との出会い、数え切れない先生たちとの出会いと助言が、いまの私を支えている。人生は楽しく、おもしろい。